

汽車はふたたび故郷へ

2012年2月18日(土)より岩波ホールほか全国順次ロードショー



© 2010 Pierre Grise Productions

イオセリアーニ監督が故郷グルジアを舞台に自身の波乱万丈な実人生を重ねて描いた最新作。2010年カンヌ国際映画祭特別招待作品として出品され、日本での公開が待たれていた。

連載を終えるにあたり、前号に続き、なぜこの映画を取り上げないのかといった読者の皆さまの疑問に答えることを中心に「鉄道と映画」をレビューします。

公開時、評判が良かったり、新聞の映画評論では評判が高かったにもかかわらず、筆者が首をかしげてしまった作品もありました。例えば、メリル・ストリープとロバート・デ・ニーロが共演した「恋におちて」は、相当評判が良かったと記憶していますが、この欄でも紹介したデビッド・リーンの名作「逢びき」を現代ニューヨークに持って行っただけのような作品であり、「逢びき」と比べると、映画の出来がかなり落ちるので取り上げませんでした。フィルム・ノワールの名手ジャン・ピエール・メルヴィルの遺作「リスボン特急」も残念ながら冴えたとところが見られませんでしたが、リュック・ベッソンの「サブウェイ」も、佳作の域にはとても達していないと思えました。

次に私の見方に反対の方が多いことは承知の上ですが、今でも人気の高い「寅さんシリーズ」について、なぜ取り上げなかったかを敢えて申し上げます。このシリーズでは冒頭によく地方線のシーンが使われますし、北海道の国鉄職員を主人公にした映画もあったと記憶しますが、寅さんシリーズのマンネリという批判はさておくとしても、何作か見るうちにこのシリーズ、あまりにもステレオタイプ化した庶民が現れ、私は辟易^{へきえき}としてしまいました。さらに鉄道の場面は、いずれも印象的とは言えないと思えましたので見送りました。

逆に私は紹介したいと思つたのですが、やむを得ず取り上げなかった作品および私の勘違いで取り上げなかった作品を挙げてみます。ポーランドの鬼才アンジェイ・ムンクが一九五〇年代半ばに共産党内の官僚主義を批判した「Man On The Tracks」は、ぜひ紹介したい作品としてあ

鉄道と映画——最終回

連載を終えるにあたって 後編

「鉄道と映画」は

相性が良い。やむなく

紹介できなかつた作品も。



文・羽生次郎

text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は公益財団法人笹川平和財団、会長を務める。フィルム・コミッション(FC)への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

りました。しかし、残念ながらこの作品は、日本では公開されていないのみならず、テレビ放映もなく、DVDも日本で発表していないので、ご紹介する訳にはいきませんでした。それからテレビで深夜に一度放映されたタジキスタンの映画「少年、機関車に乗る」、私はなかなか面白い映画と評価しましたが、ディスクにもテープにも取らなかつたため、いい加減な記憶のみで紹介するわけにもいかず、取り上げませんでした。日本で公開されず、DVDもなく、わずかに映画祭などで紹介されたアレクセイ・ゲルマン監督の「戦争のない20日間」は、なかなか見応えのある映画でしたし、昔のソ連製映画ですので、戦時中の鉄道の旅の様子が良く撮られていましたが、同様な理由で見送りました。さらに、大陸横断鉄道建設をテーマにした西部劇の名作セシル・B・デミル監督の「Union Pacific」も、日本では公開(再公開)を期待できず、しかもDVD未発売と考えていました。ところが、前者はごく最近やっとDVDが出たようですし、後者は「大平原」という邦題がついて発売されていることが分かりました。これらの作品は紹介しても良かったかと思えます。

鉄道と映画は、大変相性が良いようであり、私の気が付かなかつた傑作もあると思えますし、鉄道が重要な役割を果たし、かつ印象的な場面が撮られている名作は、今後も増えると思います。ちょうどこの文章を書いている二月にもグルジアの名監督イオセリアーニの「汽車はふたたび故郷へ」が中旬に公開されると聞きました。読者の皆さまが拙文を読まれたことを契機に「鉄道と映画」に興味をもたれ、映画館にいらつしやるようになれば、筆者としてこれに勝る幸いはありません。長い間ご愛読いただき本当に有り難うございました。